

*Hydrogamasuu*属1種を記載したい。*Gamasiphis* sp.は*G. pulchellus*(Berlese, 1887)に酷似し、*Hydrogamasus* sp.は*H. littoralis*(G.&R.Canestrini, 1881)に似ていた。前者は山野の落葉腐植層に、後者は海岸の潮間帯に生息し、土壤線虫やトビムシなどの微小動物を捕食している。*Gamasiphis*属のダニは*G. sp.*として1969年に記録されていたが、種の確定したものは本邦初記録である。

リターの分解とササラダニ相との関係IV, 季節による違いについて 大竹秀男・羽原美恵子(宮城県農短大)—オーチャードグラスのリターの分解とササラダニ相との関係について、網目が1.5mmのリターバックを用いて、草地と林地において夏(8月4日に設置)と冬(10月28日に設置)に調査を行った。10週目のリターの分解率は、夏には草地で60%、林地で52%、冬には草地で42%、林地で35%であった。全ダニ類の個体数は、夏の方が冬よりも多かった。ササラダニ類の個体数は、草地では5週目に、林地では10週目にピークを示した。全ダニ類に占めるササラダニ類の割合は、草地、林地とも2週目に最も多くその後減少した。ササラダニ類の種数は、草地では夏に17種、冬に4種、林地では夏に27種、冬に9種であった。優占種は、草地では夏に*Scheloribates laevigatus*, 冬に*Sellnickochthonius rostratus*, 林地では夏に*Oppiella nova*, 冬に*Metrioppia quadrisetosa*であった。

フトゲツツガムシ幼虫の後側毛基部の微細構造 角坂照貴(愛知医大・寄生虫)—ツツガムシ幼虫の背甲板に存在する後側毛の基部を電子顕微鏡で詳細に観察した。後側毛の内部は角皮と同様に細線維で構成されている。その基部は直径約 2.1μ で、最基部は約 1μ の電子密度の高い層から成っている。この層は高電子密度の太い線維の集合体で、これに結合して角皮との間に約 1.3μ の細線維の層が存在し、これにより剛毛と角皮の可動性のある結合を可能にしている。剛毛の真下には長く伸びる細胞突起が折り重なり、板状構造(laminated structure system)を形成している。これは、剛毛への衝撃を吸収すると共に、風圧による揺れを感受している可能性が高い。また、真下には分泌顆粒を有す腺細胞も存在し基部への分泌を行っているものと考えられる。

冠島で採集された恙虫の1未知種 高橋 守(川越総合高)・鈴木 博(長大・熱医研)—舞鶴市の沖合いにある冠島はオオミズナギドリの繁殖地として知られる。この島のオオミズナギドリの巣穴の土壌を採取し、Tullgren装置にかけ、*Eltonella*属に含まれる未知種の恙虫1個体が採取された。本種は、*E. ichikawai*或いは*E. sadoensis*に似る。*sadoensis*を孤立種とするか否かは別にして、本種はより*sadoensis*に近い形態を示す。しかし、背甲板の標準計測値が既知2種に比べていずれも明らかに大きい。又、第I脚の膝節には既知種は3本の尖頭毛があるが本種は2本。第III脚の付節単条長毛の長さが既知2種に比べて半分($45\mu\text{m}$)ほどの長さしかない。胴背毛式は既知2種と大差はない。今後、標本の数が増えた時点で種名を決定する予定である。